

國香川郡安原村にもあり、

〔日本書紀天智二十七〕七年七月、越國獻燃土與燃水。

〔東遊記五〕七不思議

一、臭水の油は、芝田の城下後越より六里ばかり東北に黒川といふ村あり、其黒川の東南五六丁ばかりに蓼村といふあり、其所に鯛名川といふ小川あり、其川端に少しの岡ありて杉林なり、其所に小き池有りて、其池に油湧くことなり、其油のわく池、此地に五十餘ありといふ、余は入口の所四ツ五ツを見る、池の大き四疊敷計、或は五六疊七八疊敷計にて、あまり大なるは無し、其池の水中に油わき出て、水と油は別々にきは立て見ゆ、水中にある時見れば、其色飴色なり、日に映じては、五色にきらめけり、其上に小屋をかけ、雨の入らざるやうにして、此あたりの里人各此池を領して、毎日油を汲取り、猶少し水の交りたるを、カグマといふ草を以てまぼり取る時、油と水とたやすくわかる、となり、よく湧池は毎日油二斗ばかりづゝを得るといふ、此油灯火に用うるに、松脂の氣ありて甚臭し、故に臭水と名く、灯火の光りは甚明らかなれど、油のへること速にして、しかも少し臭氣あれば、價は常の油の半ばかりとぞ、然れども此所より毎日數十斛の油出るゆゑ、此國にては多く此油を用う、誠に地中より寶のわき出るといふべし、されば此邊の人は、他國にて田地山林などを持て、家督とする如く、此池一ツもてる人は、毎日五貫拾貫の錢を得て、殊に人手もあまた入らず、實に永久のよき家督なり、此ゆゑに池の賣買甚貴し、今年も油よく湧池一ツ拂物に出たりといひしまゝ、いかほどの價にやと尋しに、金五百兩なりしといふ、扱其カグマといふ草は、いかなる草ぞと問ふに、京都にてシダ、裏白草などいふもの、類と聞ゆ、其草を夏の間、多く刈貯置て冬に用ゆとぞ、

〔諸國里人談四〕油が池